

江戸時代の正寿寺（2）

戦禍・震災を免れた梵鐘

史料館長 大 国 正 美

はじめに

正寿寺の梵鐘は、宝暦四年（一七五四）三月十五日の銘がある江戸時代のものである。鑄造したのは当時大坂を代表する鑄物師の大谷正次であった。この梵鐘は戦時中の金属供出、震災、震災をくぐり抜けて守り抜かれた貴重な地域遺産でもある。

正寿寺に残された記録によれば、歴史考古学研究会理事の鈴木武氏が昭和五十六年二月八日に調査をした。しかし公表された形跡が見当たらないうえ、判読に一部脱落がある。また『本庄村史』では梵鐘の存在を紹介しているのにとどまっている。

このため改めてこの梵鐘の再調査を行った。調査で大谷正次の子孫を探し、系図や当時の鑄造所の絵図の写しなどの提供も受けた。本稿では、梵鐘の銘やこの梵鐘の作者、作られた場の絵図も紹介したい。大谷家の居宅平面図や隠居所は初公開と思われ、今後の鑄物師研究にも有益と考える。

梵鐘の銘

梵鐘は縦帯で四区に区分され、次の銘文が刻まれている（一区～四区の改行を／で示し追い込んだ）。

（一区）経曰

其佛本願力／聞名欲往生／皆悉到彼國／自致不退転

（縦帯）南無阿彌陀佛

（二区）銘曰

佛所遊履／國邑丘聚／靡不蒙化／天下和順／日月清明
風雨以時／災厲不起／國豐民安／兵戈無用

（縦帯）崇徳興仁／務修礼讓

（三区）願主 当邑 中綱氏弥三右衛門

智正／妙真 釋勝圓／釋信教／釋可善

法名 皈命盡十方无碍光如来 釋教信／釋妙信／釋妙光

（縦帯）^{（無銘）} 皈命盡十方无碍光如来

（四区）撰芻兔原郡／本庄深江邑

^{（金）} 長井山正壽寺／當住持／理傳

治工大坂住／大谷相模掾藤原正次

（縦帯）宝暦四甲戌歲三月十五日

一区と二区に刻まれているのは、浄土真宗が根本聖典の一つとした「仏説無量寿經」の一節である。葬儀や仏事はすべて仏恩に対して報謝の生活を送ることを勤める内容で、一区は「阿弥陀仏の本願力により、南無阿弥陀仏の名号を聞いて往生を願えば、誰しも極楽に往くことができ、おのずと不退転の位となる」という意味。第二区は「仏が巡り歩んだ国や村はその教えに導かれない所はない。天下は平和で、太陽も月も明るく輝き、風も雨も適切で、災害や疫病などは起こらず、国は豊かで民は平穩に暮らし、兵も武器も必要がない」。続く縦帯にはそれに続く経文で「人々は徳を尊び、思いやりの心を持ち、努めて礼儀を重んじ、互いに譲り合う」とある。

第三区は、深江村の中綱弥三右衛門が願主となり八人の門徒

次であることが刻まれ、縦帯には宝暦四年三月十五日に铸造されたことが記載されている。

大坂の鋳物師・大谷正次

鋳物師大谷家については、坪井良平氏の『大阪の鋳物師大谷家の累代』（私家本、一九七四年）、および天岸正男氏の「大阪の鋳物師と真継家」（『歴史考古学』一四号、一九八四年）の先

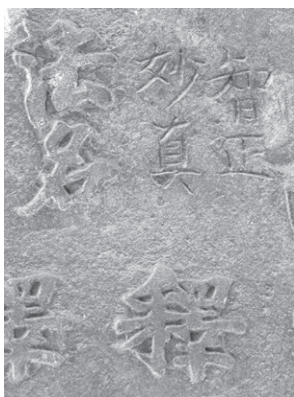


図2 梵鐘の陰刻銘

第四区は铸造当時の住持が理伝、また治工は大坂住の大谷相模・藤原正



図1 正寿寺梵鐘 寄進者銘

が協力したとある（図1）。ほかの文字がすべて陽鑄なのにに対し「智正妙真」の文字だけは陰刻で铸造が終わった後に刻み込まれたことが分かる（図2）。

三区と四区の間の縦帯の「帰命盡十方無碍光如来」は「十字の名号」とも言われ、「十方を照らし

行研究がある。両者によれば、大谷家は家国系と正次系の二流があり、正次系初代は大谷善右衛門正次と名乗り、文禄四年（一五九四）に死去した。五代徳兵衛正次が元和三年（一六一七）に相模掾の宣旨を受けた。

天岸氏は同論文で、現存・佚亡を含めた梵鐘・半鐘・燈籠などの銘文から判明する鋳物師を住所別に紹介している。この中で大谷正次系の一〇代までの遺例は不明として、十一代兼太郎正次・十四代吉兵衛正次・十五代忠兵衛尉吉久・十六代勘兵衛正次（号・孝寿堂）・十七代吉右衛門正次・十八代惣兵衛正次（号・晴英）・十九代和助正次・二十代左衛門正次・二十一代善兵衛正次（号・銅翁）の作品が確認されるとしている。

正寿寺の鐘を铸造した正次は、十七代目に当たり、作品が最も多い人物である。

大谷正次系の系図

大谷正次の子孫は現在も大阪で铸造所を经营しており、三十代大谷秀一氏（昭和八年生まれ）から「大谷家系図」を拝見する機会を得た。坪井氏の見た過去帳と十四代十五代が若干食い違う。

この系図は昭和前期、先々代の二十八代隆義氏が天王寺で市を開いていたとき、近くで足袋屋を営んでいた稲村重兵衛から写しを譲られたものだという。稲村重兵衛の番頭が市に掲げられた大谷相模掾の看板を見て、系図提供を申し出たと伝える。

その系図によると、十七代吉右衛門正次は、宝暦二年（一七五二）二月二十七日相続、寛政五年（一七九三）十月二十五日六十七歳で亡くなったとあるので、享保十二年（一七二七）生

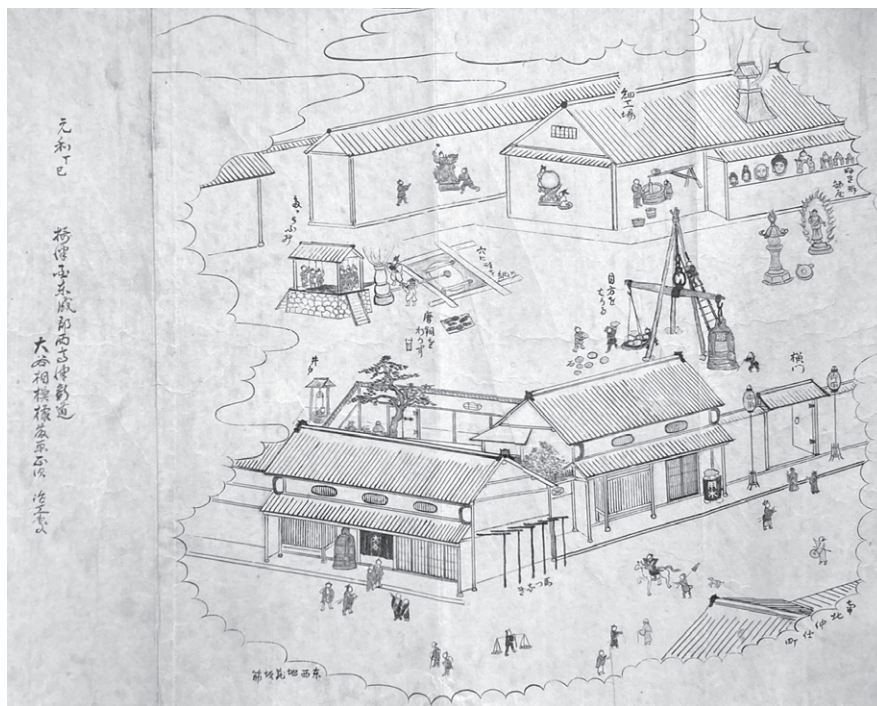


図3 大谷相模掾藤原正次治工処

まれとなる。主な作品として、天王寺の清水寺梵鐘、生玉前寺町の隆専寺梵鐘、上本町天性寺梵鐘、中寺町の本経寺梵鐘、淀川本庄の教恩寺梵鐘、有馬の温泉寺梵鐘、大和吉野山の竹林寺梵鐘、淡路塩田村の普門寺梵鐘、大和大峰山の東行場不動明王・

蔵王権現、大峰山稻村ヶ嶽の大日如来、南河内伊賀村の長泉寺梵鐘を列挙している。天明二年（一七八二）六月二十四日に十八代惣兵衛晴英が相続しているので、十七代相模掾としての活動はちょうど三〇年間となる。

描かれた鑄造所とその位置

大谷秀一氏は三点の絵図を所有されている。二十六代目の治三郎正峯（明治三十一年相続、大正十年歿）か、二十七代目の秀次郎（明治三十五年相続、昭和八年歿）ごろに、明治維新で高津地区から移転する前の様子を聞き伝えによって描いたものという。

図3は「元和丁巳 摂津国東成郡西高津新道 大谷相模掾藤原正次 治工処」と表題が書き込まれ、この図は全日本建築士会発行の雑誌『住と建築』四五七号（一九九八年）で紹介されたことがある。

図3によれば、東西通りの地蔵筋が正面で「大谷」の暖簾を掲げている。中央の左側で「たたらふみ」が行われて「唐胴をわかす」「穴に形を納め」の書き込みがある。奥の細工所では部分で鑄造した部品を組み立てたり、仕上げをしている。南北通りの仲仕町に面して横門があり、その近くでは出来上がった梵鐘の「目方をはかる」作業をしている。「元和丁巳」は相模掾の宣旨を受けたとされる元和三年（一六一七）であり、その年の治工所を想像して作成されたと思われる、原図があったのかどうかは不明だが、近世の鑄造の工程が判明する。

図4は「宝暦時代」と書かれた大谷治工場の位置を示した絵図で、正寿寺の梵鐘を作成した時期の状況を推測した絵図であ



図5 大阪全図
(天保年間)

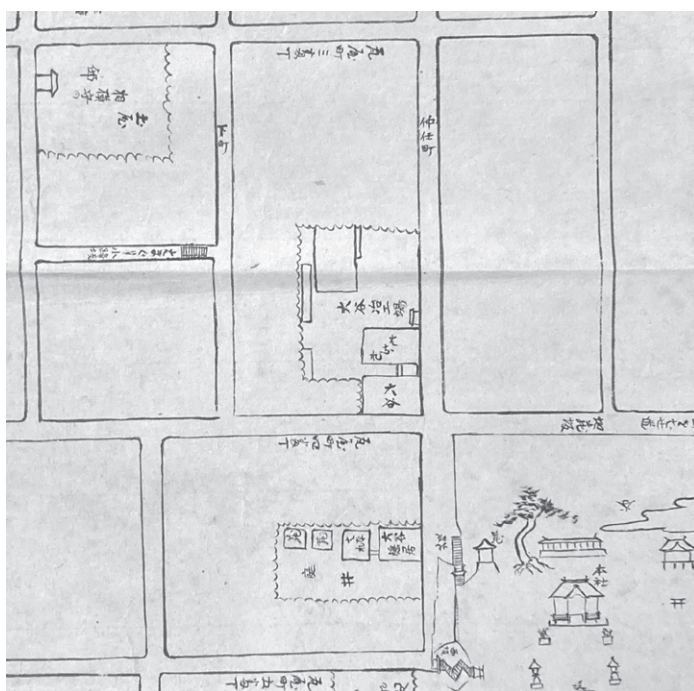


図4 宝暦年間の大谷治工場

る。高津宮の通りを挟んで「大谷隠居」とあり、宝暦二年（一七五二）に家督を譲り、安永八年（一七七九）に亡くなった

十六代勘兵衛正次の居宅だろうか。離れ、蔵が二つ、井戸と庭があった。地蔵坂通りを挟んで北側に本宅があり「大谷・はなれ・大谷治工場」と書き込まれている。通りを挟んで西には土屋相模守邸がある。常陸国（現茨城県）土浦藩主土屋政直が貞享元年（一六八四）に大坂城代となり、この地に蔵屋敷を与えられた。現在は大阪中央小学校の敷地に「土屋相模守蔵屋敷跡」の石碑がある。この位置を「天保新改 大阪全図」で高津神社と土屋相模守邸をもとに確認すると、図5の×印の位置に当たる。現在も地蔵筋の名称は残っていて、位置が判明する。

大谷家の邸宅平面図

図6は年代がないが、大谷家の立地を示した絵図と、邸内の平面図を組み合わせて一枚の絵図としている。邸宅の位置関係は図4と一致、また土屋相模守邸の位置も一致している。図4の「大谷隠居」が図6では「大谷別宅」と変化し、近隣の居住者が書き込まれている。大谷家は鳥羽伏見の戦いのあと、天王寺に移転しており、図6は近世の様子を回顧して描いた絵図だろう。屋敷の平面図によれば、南側から店、奥に三室あり一室には仏壇。左手には板の間の飯室があり、店と家族の居住空間である。

東の通りに面して大谷東ノ入口があり、ここから入ると別に玄関がある。表ノ間・中ノ座敷・奥座敷につながっている。奥座敷には「二階ハ西向、兵庫・六甲山見晴シノ大座敷也」と書き込まれていて、二階には六甲山を望む大座敷があった。上得意の客をもてなしたのだろうか。

大谷東ノ入口の北には、大谷鋳物工場に出入りする大谷ノ門

がある。タタラと大穴・天平(秤)は図3の図と同じ位置にある。鋳物工場の中にはフィゴとクロロ場、鋳物仕上場は別の建物だった。

おわりに

明治維新の廃仏毀釈で、寺院は厳しい弾圧を受けた。正寿寺の梵鐘は、その難を逃れて守られ、戦時中は金属供出の危機に遭遇した。現在の棘信勝住職が祖父の円准(昭和八年住職補任、昭和四十八年遷化)から直接聞いた話によれば、金属供出を求められ「運べないので取りに来るなら提供する」と答えたが、結局取りに来ることはなかった、という。「供出すると材質を調べるために穴をあけられるが、それもなかったので助かった」とも話していたという。

供出は免れたものの、空襲で寺は全焼、鐘楼も焼け落ちた。本尊、過去帳、蓮如上人筆と伝える「南無阿弥陀仏」の六字名号の軸を持ち出すのが精いっぱいだった。再建したものの平成七年の阪神・淡路大震災でも鐘楼は全壊した。度重なる災難にも梵鐘は生き残った。まさに奇跡である。

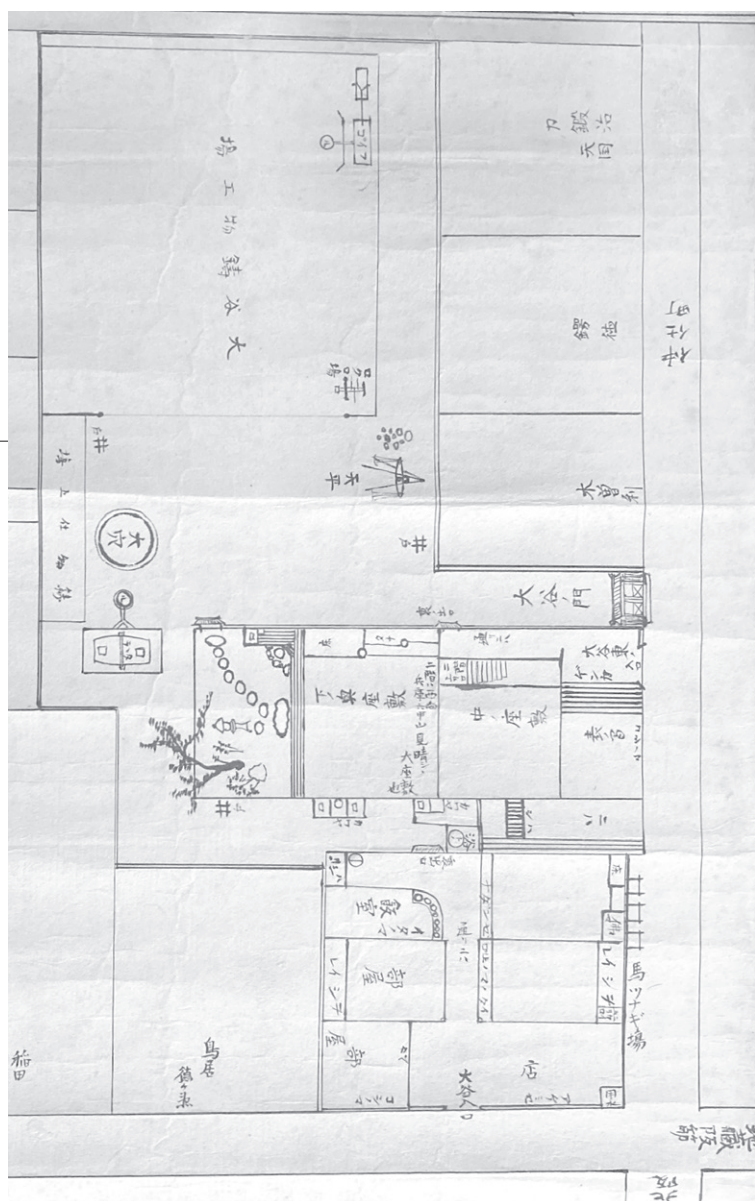


図6 大谷家平面図

今回の調査で、この梵鐘は、十七代大谷正次が、家督を継いで二年目、二十代後半の最も精力あふれる時期に製作した梵鐘と判明した。製造した場の景観も判明し、多くの人の願いが込められた梵鐘であることが改めて確認できたように思う。

なお執筆にあたって、正寿寺の棘信勝住職、大谷相模掾鋳造所の大谷秀一監査役にご教示を得た。末筆ながら厚くお礼申し上げます。